

第 50 回総会を振り返って

第 50 回日本児童青年精神医学会総会会長
京都市児童福祉センター
門 眞一郎

第 50 回日本児童青年精神医学会総会を、2009 年 9 月 30 日から 3 日間にわたって国立京都国際会館で無事に開催することができましたことを、皆様に衷心から感謝申し上げます。予想をはるかに上回る大勢の方に参加していただいたことは、総会を準備し開催した私たちには望外の喜びでした。参加者総数は 1,722 名、うち有料参加者は 1,644 名（学会員 1,004 名、非会員 563 名、学生 77 名）でした。本学会史上最多記録となりました。総会の成功は、学会員の皆様、理事の皆様、講師や座長などを引き受けて下さった先生方、ボランティアの京都府自閉症協会の方々、事務局メンバー、そして他にも有形無形の援助をして下さった方々のおかげです。この場を借りて再度お礼を申し上げます。新型インフルエンザの流行をもっとも心配していましたが、無事開催でき、開催中にも開催後にも、多くの方々からお褒めの言葉や労いのお言葉をかけていただき、大いに安堵いたしました。

開催前には学会員の方々にご心配をおかけしたと思いますが、実に多くの方が期待と激励の声をかけてくださいました。しかし中には心配を乗り越えて誹謗中傷をされた会員がいらっしゃったことはとても残念なことでした。会長の印象記としては極めて異例、あるいは非常識のそしりを免れないかも知れませんが、それに対する私の考えを述べておきたいと思います。

『ベムのメモ帳』というブログ（ある自閉症のお子さんの父親のブログ）で、会長としての私は誹謗中傷されました（<http://d.hatena.ne.jp/bem21st/20090709/p1>）。しかも開催前であり、会長講演はまだ行ってはいない段階でのことです。文面からは本学会員と思われる「ある児童精神科医」と自称されている方の、9 月 9 日の発言です。反論したい個所のすべてを取り上げることはできないので、その一部を引用しますと、

- （会長）先生の HP をみて、この世界に入った人もいます。そういう親衛隊に囲まれて仕事をしているので「井の中の蛙」になっているのかもしれない。
- 若い人達は呆然とするばかりですし、小児科医や精神科医、医師会からの信頼も失われました。私達にとって、こんな悲しいことはありません。
- シンポジウムなどで様々な議論を戦わせるのは良いでしょう。しかし、会長講演や特別講演は一方通行の発信です。偏った主張を一方向的に発信するのはクーデターです。
- 会長講演のうち「製薬企業がデータを捏造する」「製薬企業から大学教授に多額の金品が渡っている」というのは事実と反します。いまは企業も大学も倫理綱領に縛られており、学会や研究者への献金についてもきちんとしたチェックがなされているのです。
- 今回の総会は大会長に改めて失望しましたし、理事会としても今回の総会について猛省を促したいところです。仮に大会長の主張の一部に同調できても、この大会運営に同意できる人は誰一人いないはずだからです。

総会が実際に開催される前から、「医師会からの信頼も失われました」というのは一体どうということなのかよくわかりませんが、抄録を読んだだけでまだ講演を聞いてもいないのに、製薬企業に関する事実無根の講演をすでに私がしたかのようにブログに匿名で書きこむことは学会員としてどうかと思います。もし当日参加されるのなら、その場で批判していただきたかったので、私の講演の場合は短時間ではありましたが質問時間を取りました。総会の運営そのものにご意見があれば、総会議事に出席して発言すべきでしょう。参加費が高いから参加できなかったのであれば、メールや手紙でも学会理事会や事務局に意見を述べるべきでしょう。

さらに9月19日には、

- もはや科学的態度やイデオロギーではなく、カルトというほかはありません。

とまで書かれました。自分は原点に回帰したがる人間だと私は思っていますが、決してカルトだとは思っていません。狭い世界で仕事をしているので「井の中の蛙」と言われると、もっともだとは思いますが。しかし私が座右の銘にしている言葉は、「井の中の蛙、大海を知らず」ではなく、「井の中の蛙、天を知る」なのです。

ところで、製薬企業からの寄付を求めないために、参加費を前回の12,000円から14,000円に値上げすることを理事会で承認していただきました。そこで、できる限りの儉約と工夫を凝らすことに努めました。総会の準備と運営は、いわゆる学会屋さんに依頼することはせず、土倉事務所と総会事務局がほぼすべてを引き受けました。総会事務局は、小回りが利くように、京都市児童福祉センターと高木神経科と土倉事務所とで構成しました。広報の費用も切り詰めて、事務局メンバーがチラシを配り、講演を引き受けるたびにその場で広報するなどしました。ホームページに事務局ブログを創設することもしましたが、その効果のほどは不明です。赤字を出さないためには参加者を増やすことが最も重要なので、広報にはとても力を入れたのですが、それ以上に力を入れたのは魅力的なプログラム構成にすることでした。会長の主義や趣味で偏っているとの批判もありましたが、総会毎に会長やその地域の状況やらが特色を発揮するのは当然のことです。もしも常軌を逸するようなことがあれば、それは理事会で検討され修正されるはずですが、今回は(今回も)、発達障害に偏っていたとの不満の聲が聞こえそうですが、それは私の働き場所が大学ではなく児童福祉センターだということに免じてお許しいただきたいと思います。

最後に簡単に収支を報告しておきます(正式な収支決算は会計監査を受けて次の総会で承認を受けることとなります)。製薬企業からの寄付には依存しませんでした。開催趣旨に賛同された名誉会員・会員・一般市民の方々からご寄付を200万円、京都市から助成金を30万円いただくことができました。収入と支出が等しい懇親会費や弁当代などを除くと、収入は約2,540万円となりました。一方、支出は1,660万円を済み、余った890万円は全額学会へ上納しました。今後の総会運営に活かされれば幸いです。製薬企業の助けを借りなくても総会を開催することができた事実を、理事の先生方だけではなく学会員の皆様にも重く受け止めていただきたいと思います。

(児童青年精神医学とその近接領域, 51巻3号, 352-353頁, 2010年)